

東京・春・音楽祭2020

東京春祭マラソン・コンサート vol.10

ベートーヴェンとウィーン

生誕250年によせて



第3部 ベートーヴェンと楽友協会のウィーン

階級を問わず、音楽を愛する全ての人のために創設され、「音楽の都ウィーン」にとって不可欠の存在となった楽友協会。1812年に産声をあげた同協会は、ベートーヴェンとどのような関係を築いたのでしょ

曲目解説

1812年、破竹の勢いを誇ってきたナポレオン(1769-1821)率いるフランス軍が、ロシア戦線で大敗北を喫したニュースは、ヨーロッパ各地を駆け巡った。特に二度にわたって軍事占領を受けたウィーンにおいて、この出来事は熱狂的な興奮を巻き起こす。そうした中で急遽、開催されたのが、皇宮内部のスペイン乗馬学校の大広間を会場とし、600名近い演奏者と5000人もの聴衆を集めておこなわれた一般公開のチャリティ演奏会。幕開けにはベートーヴェン(1770-1827)の序曲《コリオラン》が、続いてヘンデル(1685-1759)作曲／モーツァルト(1756-91)編曲によるオラトリオ《アレクサンダーの饗宴》が、《ティモテウス あるいは音楽の力》という題名で上演された。

この催しは大反響を呼び起こしただけでなく、一般向けの恒常的な音楽マネジメント組織を作ろうという動きに繋がる(当時のウィーンには、そうした組織は未だ存在しなかった)。こうして誕生したのが、ウィーン楽友協会。なお同協会は、ベートーヴェンに新作オラトリオ《十字架の勝利》の委嘱をおこない、手付金まで払うものの結局作品は実現せず、それでも彼を名誉会員にするといった恭順の姿勢を貫く。また幻に終わった《十字架の勝利》に先立つ彼の宗教的なオラトリオ《オリーブ山のキリスト》の上演も、作曲者の生前に同協会でおこなわれている。

なお、同協会は会員制を基本としていたが、一般会員になるための条件が「音楽愛好家」であることだった。というわけで、音楽に対する深い理解や愛情を持ちながらも、それゆえにあえて音楽活動を生業としない人々によって、同協会は運営されてゆく。例えば、「コントラバス伴奏付きのチェロ・ソナタ 第2番」を作ったハウシュカ(1766-1840)や、「ピアノのための12のワルツ」を作ったゾンライトナー(1797-1873)といった人々だ。前者は官吏として、後者は法律家として活躍するいっぽう、ベートーヴェンやシューベルト(1797-1828)と親交を結び、楽友協会の発展に尽力した。

当時のウィーン楽友協会では、一般会員が中心となってオーケストラが組織され、彼らの出演する予約定期演奏会が、年間約4回おこなわれていた。中でもしばしば取り上げられていたのが、ベートーヴェンの作品である。「交響曲 第5番」もその1

つ。当時、まだまだ演奏者にとっても聴衆にとっても斬新で、時に難解だと見なされていたベートーヴェンの交響曲が広まっていった背景は、ウィーン楽友協会の存在を抜きには考えられない。

(小宮正安)